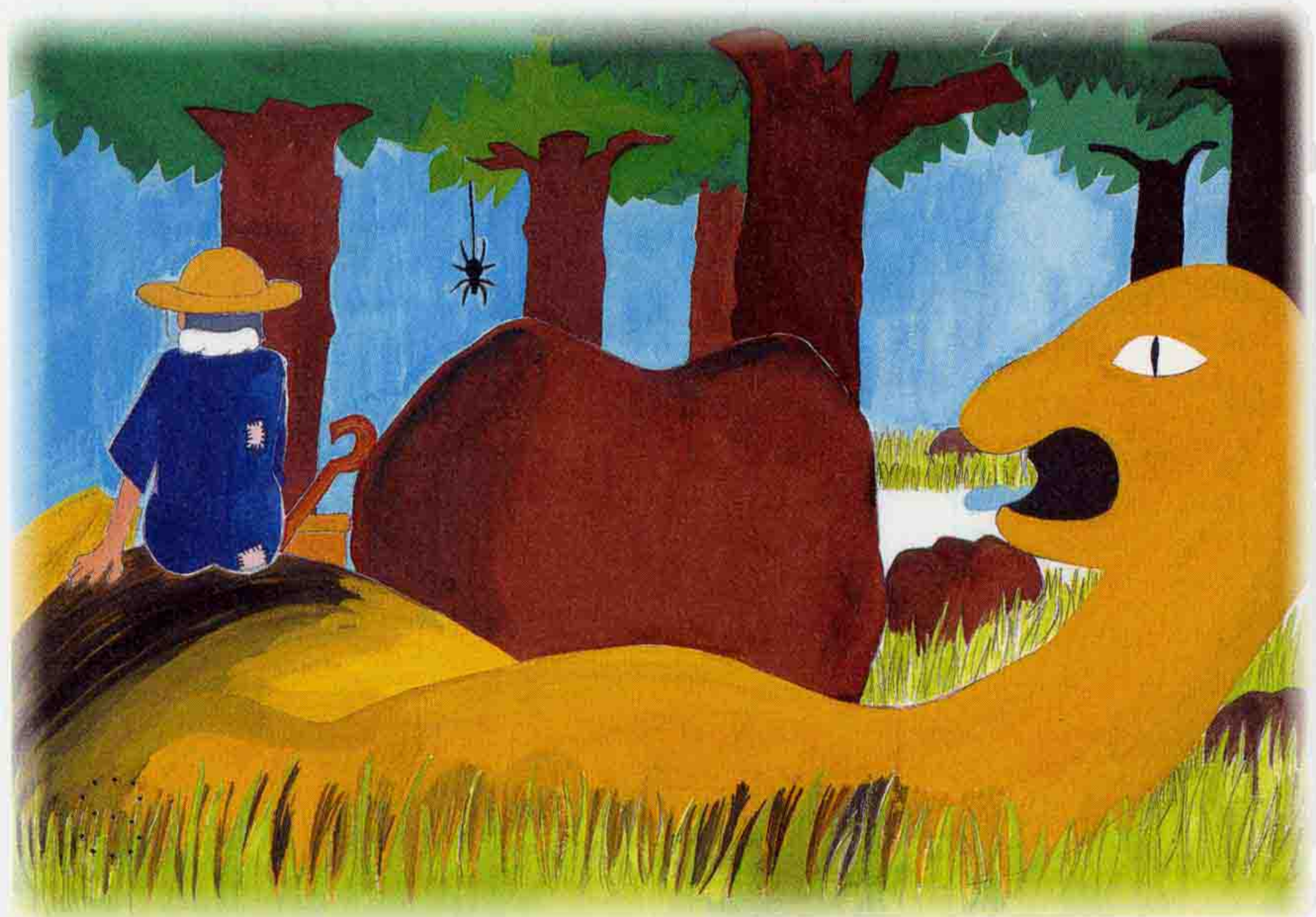


ぜにがみいわ 銭神岩

むかし、むかし、一人の村人が羽黒山正面参道から頂上をめざして登っていました。その村人は、大変暮らしに難儀をしており、何とか暮らしがよくなるようにと羽黒山神社にお参りに来たのでした。参道は岩と急な坂の連続で思うように先に進めませんでした。道程の半分を過ぎたころです。昼なお暗き杉の木立を通り抜けると、急に視界が開け、まぶしい日の光がさしてきました。

「あれ、ええながめだ。おら家は、どのあたりだんべ。」
額に手をかざしながら、山から見下ろす景色に見惚れていました。

その場所は村中があたかも箱庭のように見渡せるところでした。昼げの支度であろうか。村中にはいく筋もの煙が立ちのぼり、霞のようにたなびいていました。「もうお昼になんだんべか、今日は神社の鐘がきこえねえなあ。」



いつも聞こえるはずの鐘の音が聞こえないのを不思議に思いながら、先を急ぐことにしました。

やっとの思いで頂上の神社に着いた村人は、

「羽黒山の神様、おらの頼みを聞いてくれねえかな。おらげは貧乏で、めしもちよろぐ

に食べねんだ。何とか暮らしていげるようにしてくんねか。」

と、ひざまずいて手を合わせました。

すると、どこからともなくしわがれたか細い声が、聞こえてきたのです。

「おまえが正直で真面目な暮らしをしておるのを、わしや知つとる。おまえの望みはよ

くわかったぞよ。」

というのです。村人が驚いていると、

「よいか村人よ、山をおりる時は、来た時の道ではなく、北側の道を行くのだ。すると、

途中に銭神岩という大きな岩に出会うだろう。そこで山頂の鐘が鳴るのを待つのだ。すると、

鐘が五つ鳴るのが聞こえたら、銭神岩に手を合わせるのだ。そうすれば、きつと、おま

えの願い事はかなえられるであろう。」

声は続きました。

「神様、おらの願えを聞いてくれたんだべかな？」

我に返った村人は、声のとおりきたがわに北側の道をおり始めました。小半時も歩いたころでし

ようか、つづら折りの山道の途中で急に視界が開けたところがありました。道端に苔むした岩があるのが目にとまりました。村人は、

「ややっ、これが銭神岩だんべか。」

側に駆け寄り、じっと岩を見つめていました。しばらくすると羽黒山山頂の方から、

「ゴオン、ゴオン」

鐘の音が聞こえてきたではありませんか。

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ」

と数えると、鐘の音はぴたりと止まりました。村人は、急いでその岩に手を合わせたので

した。

その後、その村人の暮らしは日に日によくなっていきました。やがて、この話は村中に広がっていきました。

ある暑い夏の日のことです。この話を聞いた村一番の欲張りな若者が、

「おらも銭神岩にたのんで、銭がいっぱいたまるようにしてもらうべ。」

と羽黒山の北側の道を登っていきました。つづら折りの山道を汗をかき息を切らせて登って行きました。しかし、どこまで行っても銭神岩らしきものは見当りません。しばらく

く登り、山道が急に平らになり、熊笹が背丈ほどに生い茂ったところで、

「やれ、やれ、くたびれた。一休みすんべ。」

道端に腰を下ろしました。ふと、近くを見ると、熊笹が幅二メートルほど倒れて山奥の方まで続いているのが見えましました。若者はギョツとし、その場に目を奪われてしまったのでした。

この羽黒山には、その昔から山の主である大蛇が住んでいると言いつたからです。そこは、大蛇の通り道に違いありません。そのことを思いだした若者は、恐ろしくなつて一目散に山道をころげるように逃げ帰りました。

その後、若者は病に臥せつてしまつたということです。

「あの欲張りが、ざまあみらんね。銭神岩のたたなりだんべよ。」

と、村のあちこちでささやかれたそうです。

その若者が見たものは、本当に羽黒山の主である大蛇の通り道だつたのでしうか。その道は銭神岩まで続き、その岩の前でプツツリと途切れていたのでした。

この苔生した銭神岩は、その大蛇が岩と化したものであつたのでは……